

種名	キ イ ト ト ン ボ <u>Ceriagrion melanurum</u> 
分類	昆虫綱トンボ目 イトトンボ科
俗称	黄色い体色に由来し、「黄イトトンボ」の意味である。
形態的な特徴	体長は 38mm(腹長 雄:23～32mm、雌:25～35mm。後翅長 雄:15～21mm、雌:16～23mm)ほどで、雌の方がやや大きい。体色は頭胸部が草緑色で、腹部が黄色のやや太めのイトトンボで、とくに成熟個体では他種と容易に区別することができる。雄の腹部背面の 7～10 節には明瞭な黒斑があり、雌は全体に少し緑がかっていて腹部背面の黒斑がない。幼虫は、緑から緑褐色をした体長 15～17mm(側尾鰭長 5～6mm)のヤゴで、尾鰭の幅が広いのが特徴である。
分布	本州、四国、九州に分布する。離島では佐渡島、淡路島、隠岐、見島、杣島、対馬、五島列島、天草諸島、甌島列島、種子島、屋久島、口永良部島などに分布する。
生態的な特徴	成虫は5月から 10 月に見られ、とくに7月から8月に多い。幼虫はおもに朝方、挺水植物の細い茎などの垂直に近い部位に定位して羽化する。羽化した新成虫は羽化水域からあまり離れず、近くの草地で生活する。成熟すると雄は水辺に戻り、縄張りを占有する。交尾はおもに午前中に植物の茎や葉などに止まっておこなわれ、雌雄が連結したまま水面近くの植物組織内に卵を産みつける。その際、雄は雌の前胸を尾部付属器で把握したまま、脚を縮めて直立しており、これは外敵に対しての見張りの役目を果たしていると考えられる。ときには外敵に襲われて、腹部の一部を雌の前胸に残したままの個体が見られることもある。
生息場所	典型的な水田のトンボであったが、現状では休耕田などに限って見られる。おもに平地や丘陵地の挺水植物がよく繁茂した池沼や水田、湿地などに生息するが、尾瀬ヶ原、志賀高原などの高地でも見られる。かつては各地の水田などで普通に見られたが、現在ではあまり見かけなくなった。今でも本種が発見できる水田といえば、谷地の放棄された水田にしみだし水がたまり湿地化しているような場所や、池沼の岸辺の植物がよく繁茂している場所に限られる。
食性	
生息環境への配慮事項	湿田のような浅くて安定した湿性草地を好み、池沼の浅瀬や湧水、斜面からのしみだし水でできた湿地などの環境を確保することが必要である。
引用文献： http://www.maff.go.jp/nouson/mizu_midori/menu/main.html	